

石見銀山遺跡とその文化的景観

概要

石見銀山は近代以前のアジアにおける銀山発展の草分けであった。中国から韓国を経て伝わったアジアの灰吹法の改良と、16世紀、手工業による日本の独特な労働集約型小規模生産システムを通して、高品質な銀の大量生産の達成により、西洋と東洋の価値の交流に貢献した。鉱山遺跡と集落、山城、街道、湊により構成される優れた総体は、銀採掘活動に伴う独特な土地利用を特徴的に示している。銀鉱石（資源）の枯渇により、その生産は終わりを迎えたが、特徴的な豊かな自然と銀鉱山に伴って発展した文化的景観は残存することとなった。

評価基準

評価基準（ii）

16世紀～17世紀初頭にかけての大航海時代、石見銀山における銀の大生産は、日本と東アジアやヨーロッパの貿易国の間に重要な商業と文化の交流をもたらした。

評価基準（iii）

日本の金属採掘・生産における技術発展は、採掘から精錬にいたる一連の段階を含んだ効果的な労働集約型小規模生産システムの発展をもたらした。江戸時代における鎖国制度は、産業革命を経て発展したヨーロッパの技術の導入を遅らせたが、このことは銀資源の枯渇による19世紀後半のこの地域の伝統的技術を用いる生産活動の停止ともあわせて、その生産活動の痕跡を良好に残すこととなった。

評価基準（v）

石見銀山遺跡にほぼ当時のまま残っている鉱山・製精錬の場所・街道・港の施設など銀生産を示す多くの痕跡は、再び森林に広く覆われている。銀生産に携わった人々の集落を含む残存景観は、結果として顕著で普遍的価値を持つ歴史的土地利用を劇的に証明している。

鉱山活動に伴う土地利用を示す資産の構成要素は当時のまま残っており、個々の資産の有機的な結びつきは当時の土地利用形態の総体を示している。それらは豊かな山林とともに、現在、地域における生活や活動の一部となっており、文化的景観としての完全性は維持されている。銀生産から船積みに至るまでのすべての過程を示す資産の構成要素は、良好に保存されており、真正性は高い状態である。鉱山町では、意匠・物質・技術・機能・土地・環境の面で真正性を残しながら大切に維持・修復された、17世紀から20世紀に至る伝統的木造建造物群が残っている。

この資産とバッファゾーンは国内法と市の条例のもと適切に保存されている。この資産の総合的な管理（方法）は、戦略的保護管理計画のもと履行されている。モニタリングは毎年実施される。